

地域課題解決に向けた「陶育」活動に関する一考察

遠藤雅子¹

伊藤康舜²・小林はな²・市山千貴²・塚田みなみ²・松浦 響²

(1,2: 東海学院大学健康福祉学部総合福祉学科)

要 約

近年、仕事を通じて地域貢献に取り組む働き方が注目されている。岐阜県土岐市では、市内の窯元や商社のおかみをはじめ、デザイナーなどの女性たちだけで結成されたグループ「美濃焼おかみ塾」が地場産業の振興につとめている。「陶育」は同グループの造語で、将来の美濃焼の担い手や消費者を育てるための教育活動である。並行して美濃焼のファン層を拓げるために、大人を対象にした「陶育」活動にも取り組み始めた。しかし、集客に苦慮している実情がある。そこで新たな陶育プログラム開発の参考にするために消費者の声を集めようと考え、女性起業家をモニターとして招き、体験型の「大人の遠足」を企画した。本稿では、同グループメンバーとの協働を通じて、地域課題解決に向けた「陶育」活動の今後の展開について考察した。

キーワード：美濃焼、地域貢献、陶育

1. はじめに

急激な情報技術の進展に伴い、若者たちの暮らしにもIT技術は浸透している。各種モバイル機器を活用することで、日々の生活の管理ができる利便性と同時に、SNSによる人間疎外を感じられることもしばしば指摘されてきた。グローバル化によって経済の仕組みが変わり、雇用環境・働き方は大きく変化した[注1]。そして、組織で働く一人ひとりが、仕事を通じていかに地域社会に貢献するかを考えることが重要な時代になってきたといえるだろう。

働きながらどのような形で社会と関わることが出来るかを考えるために、岐阜・愛知県の企業のCSR(Corporate Social Responsibility; 企業の社会的責任)事例を調べてみたところ、様々な取組があることが分かった[注2]。例えば、本業とは別に地域の便利屋として、家の掃除や家族の送迎、家事代行など様々なサービスを低価格で実施している企業や、野菜の宅配事業をしている企業がある。これらの企業は、生産者の畑を巡るツアーや実際に野菜や果実の収穫体験などを行っている。普段あまり関わることの無い生産者と消費者を繋ぐことによって、消費者は実際に消費している野菜の生産者の顔を見ることができる。より安心感が持て、生産者もより

安全でおいしいものを、とお互いに思える効果がある。

また、ある建築業の企業では、家を建てる際に本社がある東濃のヒノキを使うこと、社内の若い大工を何年もかけて育て上げていくことに力を注いでいる。地域の素材を使いながら、次世代の人材育成にも注力する活動は、まさに「地産地消」といってもよいだろう。

企業の社会貢献活動について調べる作業を経て、個人がビジネスを通じていかに地域貢献し得るか考察するために、多様な家庭役割を抱える女性たちが仕事と家庭役割を両立させながら、ビジネスを通じて地域貢献に取り組む活動にかかわる機会を得た。本稿では、土岐市の女性グループと協働した取組の一部を紹介する。

2. 地域を含めたワーク・ライフ・バランス

何のために働くか、それは古くて新しいテーマであり、大学生生活のなかでしばしば問われる。例えば、「自分を知る」と「社会を知る」という2軸で、現在までの振り返りを行い、社会の仕組みや経済の動向、就職するに際して知っておくべき法律・ルール・マナーなどを含む諸項目を学習するのが、キャリア系の授業の一例である。このような作業を通して学生は、自分の価値観に気づき、何のために働くのか、どのような働き方・暮らし方をし

たいと思うか、考えを深めてゆく。そして今、老いも若きも考えるべき課題のひとつとして、ワーク・ライフ・バランスがある。

ワーク・ライフ・バランスとは、「仕事と生活の調和」と訳され、2017年に憲章が策定された〔注3〕。人々の働き方に関する意識や環境が社会経済構造の変化に必ずしも適応しきれず、日々の暮らしにおける役割と仕事の両立が難しくなってきたことが背景にある。特に子育てや介護などの負担を軽減しなければ、少子化による労働力不足を補うことが難しい。また、仕事上の責任や家庭役割を果たすだけでなく、地域に関わる時間や自己啓発等の時間も確保できるような働き方が望ましい。内閣府のワーク・ライフ・バランス憲章では、「仕事と生活の調和と経済成長は車の両輪であり、若者が経済的に自立し、性や年齢などに関わらず誰もが意欲と能力を発揮して労働市場に参加することは、我が国の活力と成長力を高め、ひいては、少子化の流れを変え、持続可能な社会の実現にも資することとなる。そのような社会の実現に向けて、国民一人ひとりが積極的に取り組めるよう、ここに、仕事と生活の調和の必要性、目指すべき社会の姿を示し、新たな決意の下、官民一体となって取り組んでいくため、政労使の合意により本憲章を策定する。」とある。特に女性には長年、家庭役割を担うことが求められてきただけに、未だに両立に困難を感じる人は少なくない。

ワーク・ライフ・バランスは雇用労働者を念頭に語られることが多いのではなかろうか。一般的に自営業者は働く時間に融通がきくと思われがちだが、「ワーク」と「ライフ」の境界線が不明瞭である。女性は自宅やその周辺が主な活動範囲であることも多く、そのため、生産・再生産の両面にわたる貢献がなかなか評価されにくいだろうという問題意識をもった〔注4〕。職住近接により時間的拘束が小さい家族従業員は、通勤時間がない代わりに、仕事と無償労働が混在しやすい。子どもを寝かしつけながら仕事ができるということは、休む暇がないともいえる。そこで、時間をワークとライフで切り分ける発想から、多様な役割を同時にこなす「統合」へと働き方を見直す段階に至っているのではなかろうか。

かつて民設学童保育所は、就学時に子どもを夜間まで預けることが困難になり、働き方の変更を強いられる問題を指す「小1の壁」を乗り越えるため、交代で子どもたちをケアすることから始まり、保護者たちが費用を負担し合って学童保育員を雇うに至った。また、老親の食

事の世話や見守りをする際に近所の高齢者を招き入れ、サロンとして自宅を開放することで事業化した事例もある。これらは地域のケアニーズを仕事に結びつけ、地域の雇用創出につながった。このように個人の役割統合に地域の視点を入れることで、ワーク・ライフ・バランスはより豊かなものになってゆく可能性がある。ワークとライフの二者択一から両立へという前提は「分業」である。「仕事か生活か」と役割に優先順位をつけることによって時間の使い方が見直されてきたが、「仕事も生活も」と捉え方を発展させるには、家族や地域の人たちとの助け合いが必要となる。仕事を家庭に侵食させるのではなく、敢えて線引きをなくし、仕事を充実させることによって男女ともに家庭生活も楽しく充実したものにす相乗効果を目指す考え方である。

今回は地場産業に従事する女性たちが、仕事を通じていかに地域振興に取り組んでいるか、その実情を知るために、美濃焼おかみ塾のメンバーと協働し、地域課題解決に向けた「陶育」活動の今後の展開に関して考察した。

3. 事例

3-1 美濃焼おかみ塾

岐阜県内の公的研究機関のひとつ、土岐市立陶磁器試験場・セラテクノ土岐では、分析試験、基礎研究、依頼試験、試作、窯業技術に関する相談対応、後継者育成などの業務を行っている。そして、2015年の講習会をきっかけに、「美濃焼おかみ塾」は誕生した。窯元で働く女性たちには潜在的なニーズがあるのではないかと、女性を集めてなにか出来るのではないかとということで、先輩おかみ達に「おかみの役割」についてヒアリングした。陶磁器生産や技術に関する勉強、知識や技術の共有などの「学び」と、他地域、異業種、他団体との「交流」と、「共感」の場づくり、美濃焼の魅力「発信」活動が始まった。

美濃焼は分業制が確立している。そのため、作り手が消費者と接する機会はなく、他の窯元の様子を知ることもない。しかし、おかみ塾に入れば他の街の様子、他の工場の様子を見聞きできるので、視野も広がる。現在、おかみ塾には土岐市の窯元や商社、陶磁器関連会社など計24社で働く20-60代の女性たちがメンバーに名を連ね、女性ならではの視点で美濃焼の魅力発信している。

ボランティアに近い活動形態で、テーマごとに「やりたい」と名乗りをあげたおかみ達が責任者となって、プロジェクトを進めてゆく。セラテクノ土岐の専門研究員が連絡係・まとめ役を担っている。子どもを対象とした

陶育ワークショップでは、クイズ形式で美濃焼を説明し、正しい茶碗の持ち方や一汁三菜の配膳の仕方を指導する。オリジナル紙芝居やすごろくを通じて美濃焼の原材料や作り方を学んでもらう「陶育」活動は、2019年3月に岐阜県（男女共同参画・女性の活躍推進課）より、「ぎふ女（ジョ）のすぐれもの」に認定された。

3-2 協働1：大学祭にて事前学習

卒業研究を進めるにあたり、東海地方の企業のCSR事例を調べたが、美濃焼に従事する事業所は家族経営を中心に規模が小さい事業所が多い。衰退傾向にある地場産業を元気にするためにはどうしたらよいか、跡継ぎ問題を憂う母親の視点で、地域振興につとめるおかみ塾の活動を理解するために、事前学習として大学祭でワークショップを試行した（図1-1, 2, 3, 4）。大学祭は2019年10月26-27日の二日間だったが、ワークショップは土曜日限定で実施した。

ゼミの調べ学習を模造紙に描いて展示した教室内で、美濃焼の「土」に触れるワークショップとして「粘土でクレヨン作り」、さらに子ども対象の陶育活動の一環で、「一汁三菜ぬり絵のランチョンマット作り」を開催した。シニア向けには、明治安田生命グループ介護総合情報サイト「MY介護の広場」から無料の「大人の塗り絵」もダウンロードして活用した。



図1-1 展示の一部



図1-2 展示の一部



図1-3 クレヨン作り



図1-4 塗り絵コーナー

クレヨン作りの対象は幼児から大人までと幅広く、土の温かみを感じながら手軽につくれるため、親子の参加が多かった。併せて、美濃焼の器に入った「おちゃわんパン」や「やきものアクセサリ」の販売も行った。陶

地域課題解決に向けた「陶育」活動に関する一考察

器のピンバッチやピアス、リングなどは素材の意外性から、手に取って試す人も多かった。

土岐市以外の場所で美濃焼に触れてもらう機会はあまりないようで、多い時間帯には教室内に 30 名ほどが集まっていた。売り上げに関しては、大学祭らしい“値ごろ感”がある物がよく売れていた。2 種類のワークショップは昼すぎから賑わいを増したが、美濃焼の販路拡大につなげるには未だまだ工夫が必要かもしれない。

3-3 協働 2：美濃焼モニターツアー企画

次に、ネットワーク大学コンソーシアム岐阜「学生による課題解決提案事業」について述べる。

このネットワークは、岐阜県内の大学等 25 校と岐阜県によって構成されている。1998 年に、地域における知的活動の中心拠点として地域発展に寄与することを目的に設立された。高等教育に対するニーズが多様化したことを背景に、大学間の単位互換制度を中心に事業を行ってきた。2009 年には、文部科学省「大学教育充実のための戦略的大学連携支援プログラム」に「ネットワーク大学コンソーシアム岐阜を基盤とした駅前サテライト教育システムの構築」が採択された。さらに 2012 年には JR 岐阜駅前に岐阜大学がサテライトキャンパスを開設するに至り、加盟校と地方自治体、産業界が連携してプラットフォームを形成した。

「学生による地域課題解決提案事業」は 2011 年に始まった。学生が地域の課題について研究し、解決に向けた提案を行うもので、毎年二十数件が採択され、12 月には成果報告会が前述の岐阜大学サテライトキャンパスにて行われている。

その活動の一環で、美濃焼モニターツアーを企画・実施した。美濃焼おかみ塾のメンバーによると、岐阜で暮らす大人たちは、岐阜の陶磁器を使っているにもかかわらず、普段はあまり意識していないらしい。美濃焼は暮らしのなかにたくさんあるにもかかわらず、大量生産・大量販売だったせいか当たり前すぎて、意識して使われる機会が少ないと知った。製陶業を今より活発にしてゆくためには、消費者である大人たちにもっと美濃焼を知ってもらい、手に取ってもらう必要がある。大人を美濃焼の街に呼び込むためにはどうしたらよいか、それが地域課題の一つであると考えた。

2019 年 11 月 16 日にゼミ学生と岐阜・名古屋で活躍する女性起業家 5 人が土岐市内の製陶所を訪れた。参加者概要は表 1 のとおり、実施目的等は表 2 のとおりである。

表 1：参加者一覧

モニター	女性起業家 5 名 (30 代・40 代・50 代) 出身地・現在の居住地は岐阜県内。
学 生	履修生 3 名 (2 名は部活のため公認欠席) 出身地は 3 名とも岐阜県外。
教 員	指導教員 1 名 出身地は岐阜県外。

表 2：モニターツアー概要

地域課題	衰退傾向にある美濃焼をもっと多くの人に知ってもらい売り上げにつなげたい。消費者に、土岐市に足を運んでもらうためにはどうしたらよいか。
目 的	美濃焼おかみ塾に、土岐市内でワークショップを行う際の内容を提案するために、モニターを募り、意見を徴収する。
内 容	【午前】A 製陶所にて工場見学、美濃焼に関する話を聞いた後、豆皿に銅板を貼って釉薬を塗る体験。焼いた皿は後日大学宛に郵送してもらう。 【午後】主にすり鉢を生産している B 製陶所の資料館見学。アーカイブ的な施設を見学し、美濃焼の歴史を学ぶ。DVD 視聴、ショッピングタイムも設けた。
学習成果	多様な役割を担いながら仕事を通じて地場産業振興に尽力する女性たちの“生き方・働き方”を通して、卒業後いかに社会貢献してゆくかを考えるきっかけにする。

3-4 参加者の感想

ワークショップ (図 2-1, 2, 3) と資料館見学 (図 3-1, 2, 3, 4) を経て、複数の参加者から指摘された点を以下に記す。

【豆皿づくり】

- ・体験で作るモノは日常使う道具にはならない。皿でもカップでも家族の人数分作ることができるとよい。製作費、材料代含めて上限 3,500 ないし 4,000 円が妥当と考える。
- ・ろくろや手びねりの体験をしてみたかった。
- ・工場見学にオリジナル食器づくりという付加価値をつけて提供してはどうか。

- ・大量生産の食器より、自分でひと手間かけて作って使ったら物を大事にするだろう。



図 2-1 作業場の見学



図 2-2 銅板貼り



図 2-3 釉薬体験

【資料館見学】

昭和初期の炭窯・煙突が残っており、作業場（モロ）をそのまま資料館・即売所としたもので、美濃焼の歴史

の一部を垣間見ることができた。日本一大きなすり鉢や古いすり鉢などのほか、昔の窯道具の展示は来場者の目を惹いた。

- ・伝統を守りつつ挑戦していく点に注目する。
- ・すり鉢は1つあればいいという意見もあるが、盛り鉢、小鉢、花器などいろいろな物に使える。
- ・小さなもの、可愛い柄に目がゆく。収納も考えると小さなすり鉢なら買いたくなる。
- ・食洗器対応できる商品がよい。
- ・幼児向けには軽い食器がよい。現在のすり鉢は、土の物ばかりなので、底の部分を異素材にするなど軽い物は作れないだろうか。
- ・工場内部や外観など、古さの魅力を感じさせるような趣は必要だと思う。



図 3-1 地域住民の集いの場にも使用される展示室



図 3-2 作業場を見学



図 3-3 代表して学生が絵付けを体験



図 3-4 直売コーナー

【全体を振り返って】

- ・楽しかった。車があればまた土岐市に来て体験したい。
- ・誘われたら参加するが、岐阜から電車で行くのは遠い。
- ・楽しかったが銅板貼りだけなら工場でもなくても出来る。市外のイベントに乗じてワークショップを開催して認知度を上げてよいいのではないか。
- ・対象別につくる物、集客方法を変えるとよい。
- ・広報媒体としては、中高年ならツイッターやフェイスブック、若者にはインスタ、子どもたちには学校への連絡。高齢者なら新聞、テレビなどターゲットや目的に合わせた集客の仕方が必要ではないか。
- ・食を絡めた日帰りツアー、複数の窯元巡りなどどうか。
- ・他地域のグループや異業種と協働し、商品開発、商品販売、相互 PR できるネットワーク作りをおかみ塾として検討してはどうか。双方が宣伝しあい、観光客を増やす取り組みができないか。
- ・駅のそばに小さくても良いので、アンテナショップの

ような共同ギャラリー（兼販売所）があるとよい。

- ・クラウドファンディングの返礼品として、おかみ塾ブランドのグッズや窯巡りなどはどうか。
- ・アクセサリに関しては、美濃焼だから手に取るわけではなく、素敵なデザインだと思って手に取ったものが美濃焼だった・・・というところから、美濃焼を知ることになると思う。だからシニア向け、若者向けに目を引くようなデザインができるかが鍵となる。
- ・岐阜の和傘は最近若い女性職人が、小ざれいでな空間でモダンなデザインの和傘を作り出すようになって、一気にメディアなどに取り上げられ、勢いを盛り返してきた。こんなことも参考にできないか。

3-5 考察

今回は、モニター参加者には敢えて予備知識ないまま窯元を訪ね、迎える方も日常の作業場をそのまま見て貰うこととし、ゼロからの発見、双方がお互いを知る機会、とした。同日、他地域で活動が重なったこともあり、美濃焼おかみ塾メンバーの窯元を訪ね歩き、比較するには至らなかった。尚、今回モニターに対しては、最寄り駅から土岐市までの交通費、材料費を含む体験諸費用、移動に要する費用をネットワーク大学コンソーシアム岐阜の助成金から捻出したため、自己負担することなく参加していただくことができた。

(1) 満足度の高かった点とその要因

ものづくりには、自他に対する発見が多い。自らの手で形作ってゆく作業そのものを心地よいものと感じ、仲間と語り合い、お互いの製作過程を眺めることで創作の楽しさが増してゆくようだ。今回の絵付け体験は、好みの銅板を探すところから興味をかきたてられ、色の出具合について説明を聞き、想像することにより関心が高まった。色の変化が大きいものは、実物を提示することで理解が深められたであろう。この“時間を共有すること”に満足度が高いということは、「モノからコトへ」と個人の価値観が変化したことを物語っている。物が充足している現代社会においては感動が付加価値となる。もてなす側と招かれた側の双方が、楽しい経験を積み重ねる「共創」が、生活者に選ばれる要件のひとつであることが明らかになった。経験価値が美濃焼おかみ塾のブランディングになり得るといえるだろう。

(2) 満足度が低かった点とその要因

観光施設などでは一般的に、短時間の絵付け体験とロクロ技法による半日程度の作陶体験が、観光客向けに用意されている。今回は銅板（転写シート）を素焼きの皿

に貼って焼き付けたが、手びねり体験をしたかったという声もあった。また、皿はよいが、一枚だけでは日常使いに足りないという感想もあった。体験土産で終わるか、日々の暮らしのなかで使うことにより愛着を持ってもらえる道具になるか、示唆に富む指摘であった。

期待の方が大きかった場合に、満足度は低くなる。今回は、参加者の衣服が汚れることなく短時間で出来る銅板による絵付けのほうがよかろうと配慮した。しかし、汚れてもよい服装にエプロン持参で手びねり体験するか、簡単に参加できる絵付け体験にするか、選択肢を提示すればよかった。絵付け体験も皿だけではなく、茶碗やマグカップなど、複数から選択できれば満足度は高まったと思われる。もし皿づくりだけでも、家族の人数分作ることが出来れば持ち帰って使用される道具となっただろう。ただし、個々に違うものをつくる場合、製作にかかる時間の管理や、指導にあたるスタッフ要員の確保など、次の課題も生じる。

今回はこの人数で単一のものづくりをすると、どのくらい時間がかかるか、何人のスタッフが必要になるか、量の目安を立てることができた。大人を対象とした「陶育」活動は、その後に消費の可能性が続くだけに、十分な体制で準備ができるとよい。また、資料館を訪ねることで、美濃焼の歴史に触れることもできた。参加者がいろいろな交流の場があることを知り、興味・関心をもっていただけなのであれば、当初の目的は達成できたといえるだろう。また、限られた体験ではあったが、美濃焼を普及させてゆくために、好意的なメッセージも多々得ることができた。

4. おわりに

今回は「半日程度のものづくり体験のために人を呼び込むのは難しい」ので「外に出て行ってはどうか」という意見もあった。駅舎、駅前、観光客の動線が観光地として整備されていない印象があったことは確かである。陶器祭り以外の時期に市外からの交流人口を増やすために、作業場を離れたイベント開催、出前授業、市外の催事への参加など、おかみ塾として既実践していることも多い。しかしそのような活動が知られていないということが今回明らかになった。もともと市内の人たちに向けて始まった陶育活動だが、ファンづくりのために市外、県外へと活動域を広げてゆく検討段階に入っている。溢れる情報のなかで必要なものを取捨選択する必要性に迫られている消費者たちの目にとまり、手に取ってもら

うための工夫は、土岐市に限らず各地に共通する課題とあってよいだろう。

分業体制が明確な産業のため、作り手が一消費者と接する機会はない。それだけに、使う側のニーズにあった商品開発、PR方法はおかみ達の最大の関心事である。家族が小規模化し、生活様式が大きく変化したため、食洗器対応や収納の工夫が求められている。今回の感想を踏まえると、事前に参加者のライフスタイルを確認し、当日語り合いながら食事の盛り付けや食器の使い方、手入れ・収納の仕方等に関して提案できるようなワークショップをしてから、作陶体験するようなプログラムも可能ではなかろうか。具体的には、申込を受け付けた際に、諸連絡とともに簡単なアンケートを送る。普段はどのような食器を使い、特別な時にはどのような食器を並べるか、揃えたいか。参加者の「日常」と「非日常」を把握することで、未だ充足していない部分を見つけることができるだろう。食器は道具か、それ以上の意味を持つものかは、ライフスタイルによって異なる。食器の好み[注5]や家族構成など、現在の生活様式を把握したうえで、提案内容を準備しておけば、当日、気楽な茶話会形式でライフスタイルを伝えあい、ニーズを鮮明にしてゆくことも可能となる。一つの製陶所であらゆる食卓シーンの合うものを揃えることは難しいが、おかみ塾のネットワークなら、それぞれの窯元が得意とするものを写真に撮り、提示することもできる[注6]。なお、午後訪問した資料館は工場に併設されているため、作り手と消費者の交流が可能である。それが資料館を創る際の狙いでもあった。美濃焼おかみ塾の、大人を対象とした「陶育」活動の狙いは、関係性をつくることではなかろうか。今回は制約もあり、企画不足だった点是否めないが、もてなす側も招かれた方も、共有する時間を主客同格で楽しむことができたのは、ホスピタリティ（おもてなし）精神に助けられた点大きい。単なるサービスを超えたところに通じ合うホスピタリティ・マインド[注7]の醸成が、大人の陶育の目指すところの一つとして挙げられよう。

今回の研究では、美濃焼に従事する女性たちと交流し、課題解決に向けて考えるなかで、いかに生業を通じて地域貢献しているか、働き方の一端を知ることができた。ビジネスを通じて地域貢献に寄与する働き方の事例紹介と分析は稿を改めたい。

謝辞：

本研究をまとめるにあたり調査ならびに資料提供にご協力くださいました関係各位、モニターツアーにご参加くださいました方たちに心より御礼申し上げます。特に、セラテクノ土岐および美濃焼おかみ塾の皆様、ヤマカ斎木製陶所、マルホン製陶所の皆様には大変お世話になりました。深謝申し上げます。なお、本調査はネットワーク大学コンソーシアム岐阜「学生による地域課題解決提案事業」の一部として実施しました。

注・引用文献：

1. 浦野和彦「変化のなかの産業社会」『社会研究のレシピ』関東学院大学人文学会社会学部会, 2006, 42-49 頁
2. 2019年5月-7月のゼミにおいて文献購読と並行して、「本業を通して地域に貢献する地球人の集団」たる「CSR コミュニティ」のサイト (<http://www.csr-com.jp/business/>) に、どのような企業が名を連ね、活動をしているか、その取組を分担して調べた。
3. 憲章の背景として、「安定した仕事に就けず、経済的に自立することができない」「仕事に追われ、心身の疲労から健康を害しかねない」「仕事と子育てや老親の介護との両立に悩む」など仕事と生活の間で問題を抱える人が多く見られると、内閣府「仕事と生活の調和推進サイト」に解説されている。非正規雇用の増加、正社員の労働時間は高止まりの一方で、働き方の見直しに取り組むことが難しい企業もあることから、働き方が二極化していると指摘されている。
4. 個人事業主には基本的に労働基準法の適用はない。自営業の労働時間に関する調査は、例えば2019年3月に発表された、独立行政法人 労働政策研究・研修機構の「調査シリーズ No. 187 「独立自営業者」の就業実態を参照されたい。平均的な作業日数専業・兼業によっても職種によってもばらつきが多い。なお、調査対象は、2017年の1年間に自営業、フリーランス、個人事業主、クラウドワーカーとして、仕事をして収入を得ていた者で人を雇用している者、個人商店主は対象外である。「仕事・働き方の自律性と労働時間」に関しては、2019年3月発表の「ディスカッションペーパー19-06」を参照されたい。日本における研究の多くは、時間的な柔軟性を雇用管理・職場環境の指標として位置付け、仕事の自律性が低い場合には働く者が希望するような柔軟な時間配分を実現できるとは限らないと指摘している。

労働時間の「長さ」(量的側面)に加え、「質的側面」および労働時間の「意味合い」についても言及している。

5. 今年度美濃焼おかみ塾では、大人を対象とした「陶育」活動を展開するにあたり、あらたに、「おすすめ美濃焼診断テスト」と「デザインワークショップ」のプログラムを開発した。「診断テスト」は、遊び感覚で質問紙に答えてもらい、タイプ別にライフスタイルに合う美濃焼を提案するものである。
6. 毎年東京ドーム(東京都文京区)で開催されるテーブルウェアフェスティバルに、2018年より「美濃焼おかみ塾」としてコーナーを設け出店している。そこでは、事前に対象陶器に料理を盛り付けた写真を撮影する勉強会を開き、開催期間中、展示することにより販促につなげている。
7. ホスピタリティの語源は「客人の保護者」という意味を持つラテン語「hospes=ホスピス」(または、hospics=保護する)と言われる。巡礼中に倒れた旅人を修道院で看護を行うことをホスピスといていた。今や看護や医療、福祉の現場では欠かせない要素であり、観光業や飲食サービス業においても、相手に配慮したおもてなしという意味で古くから実践され研究もなされている。服部勝人は『ホスピタリティ学のすすめ』丸善株式会社, 2008において、ホスピタリティという概念には普遍性があり、異質なもの同士の対等でインタラクティブな共働が、新たな価値を生み出すと示唆している。また、商品による差別化が難しい現代では、ホスピタリティは価格の高低を超える付加価値として扱われ、組織全体で取り組むべきであると、林田正光は『図解版ホスピタリティの教科書』あさ出版, 2016において述べている。

付記：

本稿は、第2著者が2019年度に東海学院大学健康福祉学部総合福祉学科に提出した卒業研究(レポート)を第1筆者が再分析し、改稿したものである。

A Study of a Project for Promotion of
Ceramics Understanding called 'To-iku'
Activities to Solve Regional Problems
ENDO Masako, ITO Kohshun, KOBAYASHI
Hana, SHIYAMA Kazuki, TSUKADA
Minami, MATSUURA Hibiki